

ツて居るコツプに酒をつぎ、一と口グイと飲でオイ「ボーイ」此の酒にはごみが澤山有つていかぬと云てにらみ付け、
るナドは、昨夜の足袋はだして辨當を貰ひに行ツた者と同じ仲間の人とは思はれず、
夜になつて寒い風の吹て居る甲板の上で、あやしい腰付の人が紐打などしてドツしりと腰掛の上にてたをれかゝる
影も見へた、

『毎日新聞』明治二十八年三月一日

「畫家の戦地觀察」(本書二五―二六頁)と同様、日清戦争に従軍した黒田の姿を伝える文献である。金州から威海衛に向かう前後の数日間の様子が記されている。

現在東京文化財研究所には、黒田直筆による二種類の従軍日記が伝えられている。すでに隈元謙次郎氏も「黒田清輝と日清戦役」(『美術研究』八八昭和四年四月)で言及しているが、ひとつは明治二十七年一月二四日広島滞在に始まり、明治二十八年二月六日の帰国に至るまでを記した鉛筆書きの手帖であり、『黒田清輝日記』第二巻で活字化されている。もう一点は明治二十七年一月一七日付の中村(勝治郎)宛手紙および明治二十八年一月一八日から同三〇日までの出来事を毛筆で記した和綴本で、前者の手帖には日々の行動が基本的に「なり・たり」調の漢文訓読体で手短かに速記されているのに対し、後者の和綴本は「だ・である」の口語常体で綴られ、内容も随筆風に加味されている。現地で書きとめた前者に基づき、あらためて後者を記したと思われるが、本文の内容はそのうちの一月一七日から一九日までの件をさらにふくらませたものとなっている。